

ベストピア Bestopia

辻・本郷 税理士法人
小田原支部
小原 靖夫
〒250-0011
神奈川県小田原市栄町 1-8-1
TEL 0465 (30) 2100
FAX 0465 (30) 2101

平成二十二年十二月
第二八六号

きよしこの夜物語 2

4. 原作詩歌

原作は6節からなっています。1816年に作詞されている。全文を再度引用します。

- (1) 静かなる夜、聖なる夜、
みなは眠り、目覚めているのは、
睦まじき聖なる二人だけ。
巻き毛の愛くるしい幼子が、
天の静けさにつつまれて眠る、
天の静けさにつつまれて眠る。
- (2) 静かなる夜、聖なる夜。
神の御子の、ああ、その微笑みは、
神々しい口元が愛らしく
救いのときがきたと告げる。
汝の誕生により、汝の誕生により
- (3) 静かなる夜、聖なる夜。
今宵、この世に平安がもたらされた、
金のように輝く天の高きところより、
全能の神はあふれるほどの慈悲を
示された、
イエスが人の姿となって、
イエスが人の姿となって。
- (4) 静かなる夜、聖なる夜。
今日、全能の神は、慈悲の愛を注ぎ、
イエスは兄弟として慈悲深く、
世界の民をつつみこむ、
世界の民をつつみこむ
- (5) 静かなる夜、聖なる夜。
久しく我らは望み続けた、
憤怒より我らを救いたまえ。
遠い昔、我らの父祖の時代から神は、
すべての民に思いやりの心を約束した、
すべての民に思いやりの約束をした。

- (6) 静かなる夜、聖なる夜。
天使は神を称え、
喜びは初めに羊飼いにつげられた、
そちこちで歌声が響く、
救い主が生まれた、救い主が生まれた

現在歌われているのは(1)(6)(2)の順の3節となっているがこれはチロル時代からと考えられている。客寄席には(3)(4)(5)は必要がなかつこととクリスマスに直接関係ないこと等があるが、神学的な大切な、作詞者が最も言いたかったことは省略されてしまったのである。しかし、グルーバーのメロディ効果が子守歌のようであり、民謡のようであり8分の6拍子のゆらぎが心地よく理屈抜きで広がっていった。省略されている3節について少し学んでみましょう。

(3) 節 神のあふれる愛がこの世に平安をもたらした。イエスが人となって、神の義が示された。

(4) 節 この世の人を包み込む。全人類の神である。

(5) 節 この約束は旧約聖書の時代に預言されていたことである。その奇跡が起きた。

神学上の予定、救い、神の義を歌い、民謡を超えた内容になっている。

当時のチロル地方の人々が見本市の客寄せには必要が無かったか、又は時代背景から諸民族の平和と言う広い考えを受け入れることが難しかったのかも知れません。いずれにしてもかなり早い時代に作者不詳とされ省略されてしまったようです。

5. 時代背景

1818年頃時代背景を見てみましょう。

1800年12月にナポレオンがオーストリアに進撃が始まり、時の当事者であった領主大司教コロラド伯爵がザルツブルグからウィーンに逃亡してしまいました。フランスと戦うために1792年から多くの戦士を前線に送り出し犠牲を深めていった。

1805年にも大きな痛手を被ったにもかかわらず1809年にはオーストリアはナポレオンに宣戦布告してオーベルンドルフ、ラウフェンも壊滅的な打撃を受けた。

1814年にはナポレオンは失脚するがウィーン会議で地図がが変わりザルツァハ川が国境線になり川を挟んで右側にあったオーベルンドルフは左側のラウフェンから切り離された。この分割は、家族や親戚関係を引き裂き、緊密で強固であった経済構造を破壊した（ドイツの東西分割の悲劇がすでにあった）。

更に1816年飢餓が蔓延し生活状況は苦しさに追い打ちがかけられ、1818年4月にザルツブルグで大火事があり（ミュンヘンからも見えたといわれるくらいの大火事）オーベルンドルフの上空もこうこうと赤くなり人々は不安と恐怖に襲われていた。

1792年から1818年までオーベルンドルフでは貧困が生存を脅かし、ながびく苦境の忍耐と、政府が何回もかわり人々の政治不信は頂点に達していた。慰めと平安を求めているとき呻きの中から救済と平安を待ち望んだ祈りがこの歌となったのである。

6. 聖ニコラ教会の歴史

12世紀にはオーベルンドルフに教会があり、1616年に新築された会堂は豪華であったと記録されている。

1736年大洪水にみまわれ教会内部は

三つの祭壇の高さまで浸水した。曲がりくねったザルツァハ川沿いにあるため何度も洪水に襲われている。

1769年バイエルンの職人や芸術家により新しい建築が開始され

1798年に献堂式が行われ、20年後1818年に「きよしこの夜」が生まれる。

1839年には15回も洪水に襲われる。

1899年には最大級の洪水にあい、修復不能の状態となる。再度試みられたが

1902年に取り壊しが開始された。

1913年に取り壊し作業が完了

1924年現在の地に記念礼拝堂を作る厳かな定礎式がなされる。

1937年に献堂式、財政難と資材不足のため長い工期を要した。白く塗られた小さな丸屋根に頂塔を載せた八角形のかわいらしい建物。

オーベルンドルフの治水対策堤防ができたのは1939年であった。

7. 作詩者と作曲者の生涯

きよしこの夜は長い間（36年間）作者不詳となっていました。作曲者のグルーバーが1854年にプロイセン王立宮廷楽団の調査命令に返書を送って、作詩はヨーゼフ・モーアであり、自分が作曲したことを明らかにしました。この時、ヨーゼフ・モーアはすでに天に召されていた（1848年56歳）。

今では著作権が主張されるが、当時はおおらかであったというか、二人が謙虚であったのでしょうか。

二人の略歴を素描します。

(1) ヨーゼフ・モーアの生涯

この歌が謎に包まれていたひとつの原因は、ヨーゼフ・モーアが私生児であったからだといわれていた。当時は貧しい人を増やさ

ないという目的の「婚姻の承認」という慣習があって、ザルツブルグの貧しい裁縫師であった母（アンナ・ショイバー）も「婚姻の承認」がもらえなかった。父親は借金をかかえ 24 歳で故郷（マリアプファール）を離れ、領主大司教コロレド伯爵の傭兵となり、ザルツブルグの宮殿に配属されていたが、1792 年に息子が生まれたとき、武器を捨て制服を農作業着と交換して逃亡したので、彼は生涯、父親の顔を見ることはなかった。

1800 年高等学校初年度成績優秀で、音楽の才能はザルツブルグ大聖堂合唱団主任司祭に認められ、ザルツブルグの神学校に入学が認められ、コーラスを歌い、バイオリンを演奏し、生活支援を得て 1815 年に苦学の末に卒業し、司祭となる叙階を受けた。さまざまな教会の助任、主任司祭を勤め小さな町や村をわたり歩く放浪生活を送ることになった。

二つ目の任地は父の出身地であるマリアプファール（離島のような山奥である）であったが、そこで彼は祖父と出会っている。父の面影を求めて、祖父を訪ねてこの地を選んだのかもしれない。

1816 年に祖父が他界し、自ら司祭として葬儀を行い、肉親との別離を味わっている。この時代背景はすでに述べたように、戦争と洪水の繰り返いで、住民が極貧のなかで忍耐を強いられていた、ヨーゼフ・モーアは自らの苦しみと社会の貧困と心のすさんだ状況の中で神の救いを祈りもとめて呻きながら 6 節を作詩しているように感じられる。

モーアがオーベルンドルフの助任司祭の職に就いたのは作詩した年の翌年、1817 年であった。独身であった彼は、食事はオーベルンドルフの宿屋の食堂でとっていた。よく町を歩き、住民と親しくなり、ギターを持ち歩いて弾き語りをしていて。町の人

たちはモーアに親しみを抱いていて、子供たちにも人気があった（しかし 1819 年 9 月にはオーベルンドルフを離れ次の任地へ去っている）。

きよしこの夜の作曲者グルーバーとの親交は 3 年足らずであった。この別れの時グルーバーは彼のために「別れの歌」を作曲し、「モーアはこの歌にとっても感動し、子供のように泣いていました。別れは彼にとってとても辛かったので、一人部屋をとって横になり、誰も部屋に入ることを許しませんでした」と書き残している。

その後も凶作の年がつづいて、転々と任地を移り変わらせられて 1841 年には「私がヴァグラインで暮してこの四年間、あられ、不作、大雪と神は私に厳しい試練を与えました。聖職者はいつでもどんな悪天候でも、何m雪が積もっても死を迎える人から呼ばれればどんな困難をおしても出向かなければならなかった。」と記している。

また行政の無力を教会がカバーするための「宿泊制度」にモーアは苦しめられながら奉仕に尽力した。年老いて働けなくなった下僕や、世話をする人がいない老いて衰えた人やボヘミア地方から押し寄せてきた病気の人を山岳地帯の農場で 12 名も面倒をみることになった。キリスト教の隣人愛を実践のために神が突き付けた挑戦を受けた。強靱な健康は与えられていなかった彼は 1826 年には肺結核にかかり 1848 年 12 月、肺の麻痺で亡くなっている。葬儀の費用は彼が残したものでは足りなかった。

このように貧しく生涯を終えたヨーゼフ・モーアには自画像がなかった。それで骨格から推定するために亡骸の発掘が行われ、1912 年に見出され、数年以上かけて胸像が製作されている（彫刻家は発掘されたしゃれこうべを参考に製作した）。モーアの頭蓋骨は現在のオーベルンドルフの記念礼拝堂にて埋葬されている。

(2) フランツ・グルーバーの生涯

オーベルンドルフから約 40 km のホーホブルグの亜麻布職工の 6 人中の 5 人目の子として生まれ、父のあとを継ぐことが（他の職を選択することができないほどに）強く期待されていた。

音楽の才能は幼い頃から認められ、12 歳のときに教師が病気で倒れたためその代役でオルガンを弾いたことが父に伝わり、演奏家でなく教師になることが認められた。

1807 年に教師とオルガニストの職についた。その学校には教師兼教会世話係のマリア・エリザベス・エンゲルベーカーという女性がいて、グルーバーは彼女と結婚することで教会世話係のポストについた。

1816 年、オーベルンドルフの聖ニコラ教会の臨時オルガニストになっており、そのことでヨーゼフ・モーアとの接点ができていた。その後、妻の他界と再婚、子供たちの死亡（12 人の内、成人したのは 4 人だけ）という信仰の試練を克服するために、多くの作曲をし、出版をしている。

1854 年（69 歳）のときに、プロイセ王立宮廷楽団からの調査に自ら手紙で返答したことによって、「きよしこの夜」はハイドン作ではなく、ヨーゼフ・モーアの作詩にグルーバーが曲をつけ、当日ヨーゼフ・モーアがプライベートで持ち歩いていたギターを奏でて歌ったことがわかった。この手紙の内容は客観的に真実が書かれており、グルーバーの誠実な人柄がにじみ出ている。これで作者不詳の時代はひとまず終わっている。

二人に共通していることは、貧しい田舎育ちで、自己顕示欲がなく、謙虚な人柄であったことである。

グルーバーは 1863 年 6 月 6 日に亡くなったとき、「ザルツブルグ新聞」には 10 行の記事が掲載された。

以上がヴェルナー・トゥースヴァルトナー著の「きよしこの夜」物語（アルファベータ株式会社刊）の私の主観にもとづく要約である。

では、実際に訪れた感じはどうであったかを体験にもとづいて記してみます。

8. きよしこの夜の

記念礼拝堂を訪ねて

2002 年 12 月下旬から 2 週間の日程でドイツのクリスマス为主题とする旅行に出かけ、その旅程には実はオーベルンドルフは入っていなかった。よく気の利く添乗員が現地でオプションスペシヤルということで急遽連れて行ってもらった大きなプレゼントでした。

温度はマイナス 10℃位になるので、我々はその時考えられうる防寒対策を互いに協力し合って行った。ホカロンのやりとり、靴下の重ねばき、下着の重ね着ともはや格好を気にする年でない人ばかりなので、出来映えはすべてコッケイでユーモラスであった。何しろ国境を超えるという前ぶれであったので、相当遠いのかと思っていたら、ミュンヘンからバスで 1 時間足らずで到着して拍子抜けしたほどの距離であった。

オーベルンドルフはザルツハッハ河が国境でオーストリア領だが、E C のお蔭で国境は全く感じられなかった。

雪が 50 cm ほど積もり、雪かきをしたところもうっすらと氷に覆われていた。式典のはじまりは 5 時でしたが、場所の陣取があつて、3 時には到着して寒さに闘いながら魅惑的な時を待ちます。

記念礼拝堂の小高い丘の裾野にはミニクリスマス市がオープンしており、ソーセージ、お菓子そして体の暖まるグルーワイン（ホット赤ワイン…おいしくない）ラム酒の香りがあたりを満たしています。

式典のはじまる1時間前には、この小さな丘に集まれるかというほどの人々が全世界から集まっている。世界の各国の言葉が交錯し、私が話しかけられた人は、南米ブラジルから来た日系四世の人でした。長い旅そして本物のクリスマス体験は、彼らにとっては生涯をかけた目的かもしれない。それだけに神妙でその緊張と待望感は私にも伝わってきました。

5時少し前、砲声が鳴り響き、式典のはじまりが知らされる。近くのオーベルンドルフ教区教会の鐘の音が突然鳴り響き、つづいてドイツ領のラウフェン司教座教会の鐘の音が鳴りはじめ、最後にこの記念礼拝堂の鐘が加わる。オーベルンドルフの音楽隊は記念礼拝堂のすぐ下の給水塔の横にあるポンプ小屋のバルコニーで吹奏四重奏の美しい音色をきかせてくれる。そして村長のメッセージがはじまる。村長はこの地で「きよしこの夜」の歌ができたことに触れ、

最後は「この歌の平和と神の恵みを待ち望むメッセージは、初演当時以上に現代の世界中でさらに必要とされている」と重々に締めくくる。村長はこの歌が6節構成であることと、その真意ををしっかりと理解しているようでした。更に何曲かの演奏やコーラス合唱があり、人々は寒さを忘れて(しかし震えながら)祝典のクライマックスを迎える。

二人の聖職者がキリストの降誕の福音(ルカによる福音書2章8-20節)を朗読して聖夜の祝福をあたえると、ギター伴奏でテノールとバスの二人が歌いはじめる。1818年12月24日の初演の光景を再現される。最後に全員で歌って祝祷をもって礼拝は終わりました。

参加した人は肉体は厳しい寒さでこごえているが、魂は温かさで満たされ、幸せな気分ですれぞれバスに向かう。“アウッフ・ビーダー・ゼーン”と言いあいながら。